

## ブラームス：ピアノ四重奏曲第3番 ハ短調 作品60

ブラームスはこの曲の出版にあたって、「頭部と、その前にピストルがある口絵を書いてもよいでしょう」という手紙を出版社の社長あてに書いたという。主人公の青年が失恋による絶望からピストル自殺する、ゲーテの「若きウェルテルの悩み」を引き合いに出したものであり、このエピソードから、「ウェルテル」と称される作品である。

この曲の最初の構想は出版よりおよそ20年前にさかのぼる。折しもブラームスにとっての「ウェルテル」的なセピア色の青春時代であった。当時、ブラームスを音楽家として高く評価してくれたシューマンが、入水自殺をはかり精神病院に収容されたのをきっかけとして、ブラームスはシューマンの家族を助けるために奔走し、クララ夫人に対する叶わぬ恋に悩んでいた。

楽曲に関するエピソードや、ブラームス自身の伝記的な側面を、ただちに楽曲の内容解釈に結びつける行為に対しては、音楽学者は慎重な立場を取るようである。しかしながら、音楽を受容する聞き手にとって、鈍色の雲がたちこめたような陰鬱な気分の中に、時おり差し込む光や、どうしても湧き上がってしまいうパッションの表現、甘く苦く切ないメロディなどが絶え間なく交錯するこの楽曲の様相は、ゲーテが悲劇的な物語に込めた青春の激情と美しさを想起させ、またブラームスの内向的で不器用な人間味も感じさせる。

### 第1楽章

冒頭のピアノの鋭い1音と、弦楽器の重く痛ましい嘆きのフレーズは、作品全体を印象付けるインパクトのある主題となっている。その後音楽が動き出すと、上昇して長調に主題が展開し、再び深く沈み込んだ短調に戻り、と行ったりきたりの動きを繰り返し、個々の楽器が互いに折り重なりながらメロディを形成し、うねりながら進行していく。鈍色の雲の間をジェット機で飛行していくときに、きらきらとした太陽の光と暗く重い雲の影と、めまぐるしく景色が変わっていくような風景も思い起こさせる展開である。

### 第2楽章

鋭く細かい三連符のリズムの上に、裏拍を使った噴出するようなメロディが呼応する。このモチーフが、楽器が担当を入れ替わりながら進行していく。火山のマグマがエネルギーを内に込めながら小さく噴火をしているような、山に棲む魔女がぐつぐつとあやしげな薬を鍋でたぎらせているような、静めたいけれどもどうしても湧き上がってしまう激情を持て余している心のものである。

### 第3楽章

バイオリンの伸びのある甘いメロディが、解決を見ることなく永遠に続いてゆく。喜び、幸福感、哀しみと痛みが交互に、呼吸をするように膨らんでは鎮まってしまうことを繰り返す。感情のふくらみは心の内側だけで完結していて、決して表に現れてくることはないかのように思われる。愛のよろこびと同時にちょっと哀しい一途な思いが込められているかのようだ。

### 第4楽章

ピアノがつくる安定した2拍子の上に弦楽器の不安なメロディが乗っていく。「運命」のテーマが引用され、叩きつけるような三連符が繰り返される。激しさと静けさが交互に繰り返す、緊迫した様相のまま進行していく。突如としてピアノが天啓のような長調のファンファーレを奏でる。その後ふたたび怪しげな雲の中に沈み込み、それまで激しくみなぎっていたエネルギーが長い息づかいで徐々に収束した矢先、不意に長調での力強い幕引きを迎える。ぶつ切れ感さえあるどこか寂然としない曲の終わらせ方は、作曲者の意図した謎かけであろう。